

「横浜開港と蚕都上田」

～故・矢島好高君（7組）へ思いを寄せて

宮原 豊（9組）

今秋の第 18 回「蕨の会」は横浜探訪の予定で、埼玉県在住の僕が早くから幹事に名乗りを上げて準備を進めていたにも拘わらず、よんどころなき理由により来年に順延してもらいました。「蕨の会」の活動は毎回 65 期 H P に紹介されていますが、主宰者の成澤文和君（4 組）の発案により近隣の歴史探訪から始まりました。毎回、幹事の創意工夫による教育的（エデュケーショナル）な企画とともに、訪問地での地酒による仲間との歓談が老いていく脳の活性化に効くようです。そんな中で僕にとって印象深かったのは、沼田城址（上州真田領）散策と深谷市（渋沢栄一の生誕地）訪問でした。

関西の旅（大阪城・高野山・九度山）、仙台真田氏の旅（宮城県蔵王町）、松代・上田を訪ねる旅と、宿泊を伴う旅行も織り交ぜています。僕は関西と松代・上田には参加できなかったのですが、仙台真田氏を巡る旅（作並温泉泊）ではガイド役を務めました。

成澤会長は春秋 2 回の旅を確実に実行してきました。それなのに 5～6 年先まで立てていた中長期計画をここで中断することになり真に申し訳ありません。

そこで、お詫びを兼ねて、なぜ僕が横浜の旅の担当に志願したか、その所以と計画のあらましを、来年の横浜訪問の実現を期して、ここに投稿します。

故・矢島好高君から手紙をもらったのは僕が横浜のジェトロ事務所へ転勤して間もない 2007 年～08 年の年末年始のころです。何でも「地元で蚕都上田の歴史研究をしているが、港・横浜と上田との関係を調査したい。近日中に横浜を訪ねるので協力してもらいたい」と言うのです。

インド帰りの僕は、東京本部の対日投資部長（外国企業誘致）に就いたものの、そのころあたかもインド・ビジネスの伝道者にでもなったかの如くインド講演会や研究会で多忙な日々を過ごしていました。職責上はインド企業誘致のためという名目に合致していなくてはなかったのですが、実際はあまり関係なかったです。

横浜の地元経済界は、ムンバイ市と横浜市の長い友好関係と文化・人的交流を礎にしてインド・ビジネスの拠点を立ち上げたいと盛り上がっていました。そこで定年までの約 2 年を、「横浜インドセンター」創立に協力することになりました。

徳川幕府・大老井伊直弼は勅許を得ぬまま安政 5 年（1858）に日米修好通商条約を締結、続いて蘭・露・英・仏の 4 か国とも同様の条約を締結し、安政 6 年（1859）に横浜、長崎、箱館を開港しました。その後横浜は急速な変貌を遂げ、それまでは東海道の本道から外れた一寒村にすぎなかったのが、2 年後の文久元年（1861）には、外国人居留者は、英 54 人、米 38 人、仏 14 人、蘭 20 人を数え、他に露や他のアジアからの商人も含めた外国商

館が居留地内（関内）に集められ、時代を先駆ける意欲的な商人が続々と押し寄せました。

インド商人も開港後には来訪したと考えられますが、インドは大英帝国の植民地だったためにインド人としては記録されていません。時は流れて大正 12 年（1923）9 月 1 日に、関東大震災で壊滅的被害を受けた横浜市に在住するインド人のうち、116 名が被災、28 名が死亡しました。山下公園の入口近くに見えるエキゾチックな「インド水塔」は、犠牲になったインド人を手厚く葬ってくれた横浜市と横浜市民に感謝し、インド人有志が昭和 14 年（1939）に建立したものです。今も毎年 9 月 1 日にはインド大使の参列を得て、在住インド人、横浜市幹部、横浜市民が慰霊祭を執り行っています。

職場近くの「横浜開港資料館」は、インドと横浜の歴史を調べるために何度も通ったのですが、矢島君の関心事項である上田と横浜の歴史に関係のある情報がありそうでした。

この資料館に長く勤務する西川武臣氏は、「当館も様々な資料を収集し研究を始めたところだが、当初の開港予定地であった神奈川を横浜に変更するかしないかの早い段階から、かなり多くの信州人が横浜に来ていました」（以下は西川氏とのやりとり）

「そんなに早く横浜に来ても外国人はいなかったですよね」

「そうなのだが、開国派老中の藩主・松平忠固の命を受けてのことなのか上田藩の動きは早く、保守的で動きの遅い江戸の間屋の先を越して、横浜開港の建設工事に参画したり、徐々に集まり始めた外国人を相手に商売を始めたようです」

「上田では、蚕都上田と横浜の関係を調べたいと言っているのですが、その頃の生糸貿易に関係する史資料はあるのでしょうか？」

「我々も収集した資料から研究・分析を続けているが、例えば初期の生糸商人で、謎に包まれた中居屋重兵衛は興味深いです。開港直後の横浜で最も多くの生糸を輸出しながら、幕府から営業を停止させられ、2 年足らずで没落しました」

「中居屋重兵衛って誰ですか？」

「重兵衛は上州嬭恋村出身で、本名は黒岩撰之助、上州だけでなく信州の商品を手広く扱っていました。中居屋重右衛門（本名：松田玄沖）と名乗る重兵衛の右腕・大番頭がおり、彼は元は信州飯沼村（上田市上丸子飯沼地区）の医師で、生糸貿易の先駆者として安政 6 年に横浜で活動していた記録が発見され、今、少しずつ分析・研究を進めています」

このような有用な話を仕込んだ僕は、矢島君が横浜に来るのを待っていましたが、彼の来訪は実現せず、僕も 2009 年 3 月にジェット口を定年退職、財団法人海外技術者研修協会（AOTS）で新しい仕事に就きました。矢島君とは結局再会することもかなわないまま、そのうちに彼は帰らぬ人となってしまいました。

さて、話を横浜開港資料館に戻します。同資料館は、横浜開港百年（1959 年）を記念して編纂された「横浜市史」のために収集された資料を基に 1981 年に開館しました。関東大震災で横浜の歴史を伝える貴重な史資料が消失しましたが、横浜市は「横浜市史」編纂のために国内外から古い記録、地図、写真、新聞、絵画等々を収集、時間をかけて横浜

の歴史研究を続けています。

同資料館の館報「開港ひろば」第 101 号（2008 年 7 月）には、中居屋重兵衛関係資料として、「番頭の重右衛門が記した 2 冊の帳簿を、（婦恋村の）黒岩家が重右衛門の子孫の松田家（上田市上丸子飯沼地区に代々居住）から譲り受けた。そこで横浜市は上田市上丸子飯沼地区にも調査団を派遣し、幕末から明治初年の飯沼地区の生糸出荷に関する資料の所在確認調査をおこなった」ことが紹介されています。

また、同第 105 号（2009 年 7 月）には「生糸貿易商中居屋重兵衛の盛衰」が、第 108 号（2010 年 4 月）には「生糸売込商中居屋重兵衛店の経営悪化をめぐって」が発表されています。いずれも執筆者は前述の西川氏（現館長）であり、これらを読むと矢島君が生前に横浜に来ていればよかったのにと残念でなりません。

さて、以上のように僕の意図は、「上田と横浜」の関係では横浜開港資料館訪問は外せません。横浜は横浜シルクセンター、横浜開港記念館（旧横浜市会）、神奈川県庁本館、横浜税関博物館、山下公園、氷川丸、ホテルニューグランド、神奈川県博物館、日本郵船歴史博物館等々と、どれをとっても日本の近代史と切り離せない場所ばかりです。懇親会は一店に絞るのは至難です。たった 2 年足らずの生活でしたが、思い出の場所が多すぎて分裂病になりそうです。

2015 年 5 月に 9 組+a で関内を散策したことがあります。この時は、シルクセンター、開港記念館、税関博物館を回り、中華街で食べてカラオケをしました。半数は飲み会とカラオケだけの参加だったような気がします。そんな中で、横浜市在住の武澤美佐子さんが横浜の歴史に熱心に耳を傾けてくれました。（2024 年 7 月 1 日記）



2015 年 5 月横浜中華街にて

前列左から 塚田道明、保屋野良治、武澤（旧姓保屋野）、西村賢治、小山佳朗、上原昇（2 組）、

後列左から 筆者（宮原）、櫻田喜貢穂（7 組）、牧野泉